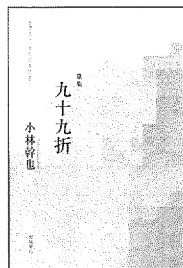


小林幹也歌集
『九十九折』



令和2年4月25日
飯塚書店 1500円(税別)

歌集を読むとき、私は基本的に作者の姿を探そうとする。この歌人はどこで何を生業としているのか、家族構成はどうなのか。あるいは日々どのような事を考えて暮らしているのか。もちろん、それが事実や現実である必要はない。それがたとえ仮想であろうと、作者が見せようとする作者の姿を読もうとしてきた。

講堂の窓より隣のマンションの
室外機見る祝辞聴きつつ

ぼてんヒットといふのだらうか

もらひ泣き卒業式次第の行間

おそらく勤務先の学校の卒業式の
一コマ。正直に言えば、祝辞は少な
くて短い方がいい。定型文の羅列を

拝聴するのは疲れる。隣の室外機を見上げることしか触れないが、作者のため息が聞こえてきそう。対して二首目は、卒業生の答辞だろうか。「祝辞」に比べると美文ではないし読むのも下手。感極まって泣いたのかもしれない。まさに、ぼてんのゴロだ。それでも、聞く者の胸を打ち「もらひ泣き」を誘ったに違いない。「式次第」はいわばメニュー表。料理と同じく、大切なものはお題目の間にあるのだ。そういうことを間接的に言おうするのが、この作者の作歌姿勢なのかもしれない。

室外機並ぶ伏見の路地裏をとき
をり幕末志士の碑挟む

あるあるな風景だが、それだけではあるまい。先の「行間」のように、室外機の「俗」と志士の「志」の対比を思うのだらう。そして、そういう想いが、志士に比して自身の平穏な日常を振り返りつつへわれ何をやり遂げて果つ ゴーギャンの

タヒチのごときけだるさのなか
と、率直な歌を詠ませたのだらうか。

わが人生日向日陰と入れかはる
九十九折ゆくバスに乗せられ

本歌集の表題「九十九折」の入った一首。ジグザクの道走るバスの窓際に座る作者を、方向転換のたびに日射しが照りつけ、また陰らす。

その明暗に、作者は自らの人生を重ね合わす。本意ではないこともあったことを「乗せられ」は示す。作者四十代の作というから、人生の半ばに至っての感慨だ。続く「取りかへし」のつかないことがまざまざと日にさらされる峠の道よ」は素直な歌。加えて、本歌集には「日射し」に関する言葉が多く見られた。おそらくそれらは、単なる写真ではあるまい。折に触れてのまざままな思いを白日の下にさらすことで、作者は自身につきつけ続けるのだらう。